

中國撰述佛典と大藏經

木村 宣彰

仏教が東漸してより漢魏六朝を歴て隋唐までに三蔵は大いに備り、降って宋元代に大藏經が刻印されるに及び法宝はいよいよ伝持宣揚されて今日に到っている。その間に道安・慧遠をはじめ道生・僧肇らの諸師、天台の智顗・湛然、華嚴の法蔵・澄観、三論・法相の吉蔵・窺基、浄土の曇鸞・道綽・善導、さらに禅の慧能・神秀、密教の一行・恵果らの俊徳が接踵して輩出し、幾多の注釈判教を為している。それら諸師の撰になる章疏を中国撰述

仏典と称する。

隋書経籍志に「民間仏經、多於六經、数十百倍」と記している。隋代すでに然る。唐代にはより隆昌し宋元明に三蔵及び注釈書は愈々慈多にして称計することが出来ない。かくて大藏經に入蔵されて今日に伝わる経論章疏はもとより多いが、入蔵されず中途亡佚の仏典注釈も亦

少なくはない。しかるに大藏經によって法宝は護持され、後学の受ける嘉思は計り知れない。歴代刻蔵の偉業と光沢を決して看過し忘却してはならぬ所以である。

中国仏教の黎明期における最も重要な課題は胡語の仏典を民族の言語文字に正しく翻訳することであった。中国に伝えられた表音の胡語による仏典は訳經三蔵によって表意の漢語に翻訳され漢文仏典となり、それが中国人の佛教信仰の基調となる。その場合、仏典の書写は不可欠の重大事である。後漢書宦者伝の蔡倫伝によれば、和帝の元興元年（一〇五）にすでに紙が発明されており、佛教伝来の当初から中国には紙が存在していたようであるが、仏典の書写には縑帛や素などを用いていたのである。後漢の支婁迦讖が訳出した般若三昧經四事品には、疾く

三昧を逮得する為の四事を説き、仏の形像を作ることと共に「好素」に仏陀の教えを書写する功德を説いている。既に後漢代に訳出された仏典に屢々好素などに經典を書写することを勧めている。

実際にそれを行なった例として慧皎の高僧伝などに次の様な史実を伝えている。魏の甘露五年（二六〇）に般若經の原典を求めて雍州を発つて于闐に求法した漢人僧の朱士行が、西域南道の仏教都市于闐で放光般若經の梵本九十章六十万余言を得て「皮牒」に写して洛陽にとどけ、善く方言を解する河南居士の竺叔蘭によって訳出されたその放光經二十卷を支孝龍なるものが校合し定本を作り十四匹の「縑」に書写したという。

また出三藏記集所載の正法華經記などによれば、西晋の太康七年（二八六）に竺法護は正法華經十卷を翻訳し、永熙元年（二九〇）に至って洛陽の白馬寺や東牛寺でこれを講じ、重ねて校定を為して翌元康元年（二九一）四月十五日に孫伯虎が長安で「素」に写したということがある。

このように無地の絹に書写した経卷を素經という。今日に伝わる素經の一例として無量寿經がある。かつて大谷瑩誠がパリでそれを写真に収め、原寸原色に複製し、

内藤湖南の跋を付したものが世間に知られている。外にも燉煌などからも多くの帛書の仏典が発見されている。

中国に仏教が伝来した初期に、すでに製紙法は発見されていたが、貴重な紙は未だ広く普及せず、当時は専ら縑や素を以て写経が為されていた様である。訳經三藏によって翻訳された訳文は直ちに筆受者によって浄写される。中国では訳經の開始がそのまま写経の濫觴となる。

今、写経の事実を仔細に跡づけることは出来ないが、姚秦の鳩摩羅什らによる盛んな訳經活動は、当然のことながら写経の盛行を促す。現に西涼の建初二年（四〇六）に書写された十誦律比丘戒本や、北涼の承平十五年（四五七）の奥書を有する仏説菩薩藏經など鳩摩羅什の翻訳になる経論がそれぞれ燉煌やトゥルファンから発見されている（拙稿「鳩摩羅什の訳經」大谷大学研究年報三十八参照）。

隋代の写経の隆盛について前記の隋書經籍志に隋文帝の開皇元年（五八二）、天下の諸大寺に「官写一切經」を安置したことを述べている。また玉芝堂談薈（卷十五）に隋の大業（六〇五—一七）年間に仏經の訳して漢文に成るものに六千九十六卷に達し「写經四十六藏、達十三万卷」と語っている。次いで唐の貞觀（六二七—四九）のはじめには普光寺の玄琬が宮中の徳業寺で皇后の為に大藏經を

写す監督をつとめたことが伝えられている（統高僧伝）。

このように隋唐時代にはかなり組織的に仏典の書写が進められていたのである。書写された経巻には黄卷赤軸の装幀が施されて永く後代へと伝えられる。

書写された鈔本による書物の流布から一步も二歩も進めたのが印刻出版である。仏典の雕版が何時から始まるのか。それを詳らかにすることは容易なことでは無い。

統高僧伝の吉藏伝には、

晩以大業初歳、写二千部法華、隋曆告終、造二十五

尊像

と述べ、隋煬帝の大業年間の仏典書写のことを記している。また同じく神照伝にも「造像数百鋪、写經数千卷」と写經造像の事を記録しているが、未だ雕印仏經の記事は認められないのである。

ところが、唐の司空表聖文集（卷九）には「為東都敬愛寺講律僧惠確化募雕刻律疏」（四庫提要集部所収）と仏典の雕刻について記している。この文に「印本共八百紙」と注記している。実に仏典の刻印出版は中唐期に始るのである。

当時の遺品としては、唐の咸通九年（八六八）の識語を有する金剛般若經がある。この金剛般若經は一九〇七年、

英人スタイン Aurel Stein が燉煌千仏洞で蒐集したも

ので、長さ五メートル余の首尾完全な形で大英博物館に収蔵されている。巻首の仏説法図の後に「咸通九年四月十五日王玠為二親敬造普施」とあり、王玠と称する人物が刻造し普施したものである。この様に唐代には仏典の刊行が或る程度は普及していたと考えられるが、宋代以降に長足の進歩をとげる。唐にも単經の印刷は行なわれていたが、宋代に至りはじめて大藏經の刻印刊行が行なわれるようになる。佛教信仰の厚い宋の太祖は、開宝四年（九七二）に高品張從信を益州（成都）に遣わし一切經の板刻を命じ、十数年の歳月を閲して完成したのである。益州で雕造された一切經の板木は実に十三万余という龐大なものであった。この北宋勅版の大藏經は国家事業として為されたもので完成の晩にはわが国をはじめ高麗・西夏など近隣諸国に贈与されている。蜀の特産の上質麻紙を使って摺られた五千四十八卷の大藏經は、東大寺齋然によって宋から日本に齎されたのである。日本に將來されたこの北宋勅版の大藏經は藤原道長の法成寺に安置されたが、法成寺の失火と共に焼失した。しかし、それから転写された諸經は法隆寺や石山寺などに伝わり、日本佛教の發展に少なからぬ影響を与えたのである。

北宋版の後、南の福州東禪寺で私版の一切経が作られている。更に南宋でも福州開元寺版、湖州版、磧砂版等が屢々開板されている。北宋における勅版大藏經の雕印からほぼ半世紀を経て高麗では顯宗のとき大藏經の印刷が企画されたのである。顯宗は崔士威らに命じて開元釈教錄の五千四十八巻を出版せしめたのである。次いで高宗はその二十三年に重ねて大藏經の再雕を發願し、大藏經都監を組織して十五年の歳月を費して完成している。

この再雕の大藏經出版に際しては高麗沙門の守其らが勅を奉じて數種類の批校本を以て極めて嚴密なる校勘を為したのである。その努力の経果、世に善本の誉が高く、後にわが大正大藏經の底本に採用される。再雕に際して守其は、初雕本・北宋勅版・契丹版の諸大藏經及び古写本等との至嚴の校合を為し、自ら新雕大藏校正別錄三十巻を著わしている。また、それを抄出した麗藏新雕本校記一卷も広く流布している。それらを一読するとき、仏典の出版刊行に際して諸本との校勘が如何に重要不可欠なことかを否応無しに知らしめられるのである。

日本では中国とはやゝ事情が異り、国語によって經典等を翻訳するという様なことは無く、漢文仏典をそのま

まに受容したのである。中国の仏教徒が訳經に払った労苦を日本では専ら写經に注いだ。日本では漢文に和訓を付して読むことが案出され、訓読することがそのまま翻訳を兼ねていたのである。

欽明天皇七年(五三八)に百濟の聖明王が使臣を派して仏像及び經論を獻じ崇仏の表を奉ったと伝えられている。その經論がいかなるものであったか不明である。また一切經が何時頃、日本に齎されたか知らぬが、考德天皇の白雉二年(六五二)、味岡宮に二千百余の僧尼を請じて一切經を読ましめたことが日本書紀に見える。「一切經」という文字の文献上の初見であろうか。また天武天皇白鳳二年(六七四)三月に「是の月、書生を聚め、始めて一切經を川原寺に写す」(日本書紀)と一切經書写のことが伝えられている。一切經の書写には必ず原本が必要である。川原寺での一切經書写の歳は唐に開元釈教錄編纂以前のことであり、当時の一切經とはいかなるものであったのか、興味のある事項である。いずれにせよ欽明天皇の代には半島の百濟から「經論」が伝えられている。更に数次に亙る遣隋使、遣唐使によって将来された隋唐写經を原本と為して写經を行なったのである。

白雉四年(六五三)に勅を奉じて遣唐大使小山上吉士長

丹と俱に入唐した道昭が将来した経論の写本は殊の外に善本であった。続日本紀の文武天皇の四年（七〇〇）、道昭示寂の条に、彼の平城右京の禪院に言及し、

此院多有経論、書迹楷好不錯誤、皆和尚之所将来者也

と述べているように、道昭が齎した経論は、厳密な校合を経た錯誤の少ない善本であった。そこで元興寺東南隅の禪院に安置されて当時の仏典書写の原本として盛んに依用されたのである。

実際に当時に書写されたものとしては、文武天皇十四年（六八六）に河内国の知識による金剛場陀羅尼經一卷や文武天皇の慶雲三年（七〇六）の浄名玄論八巻などが現存しており、広く知られている。

奈良時代に仏教は目覚しい発展を示し、当時すでに官立の写経所が設けられている。天平六年（七三四）、聖武天皇が発願書写せしめた勅願一切経には「写経司」の名が認められる。官立の写経所たる写経司の下に多くの経生、校生、題師、堺生、装演師らがそれぞれ職務を分担して写経を完遂した。写経所においては、堺生は料紙に天地の界線と野線を描き、経生は原本を忠実に書写し、校生は書写された経文の訛誤を正して、その上で装演師

に由て経軸・表紙・紐などの装幀を施したのである。而るのちに題師が経題を書き写経が完了する。写経終了後の使用紙数の届け出によれば、一人平均して一日に麻紙七枚を写している。麻紙一枚を十七字詰二十五行として見ると一日に約三千字の書写を為したことになる（日本写経総覧）。かくして写された経論に対して厳格なる校正が為される。当時の校正結果に関する詳細な報告書が正倉院文書の中に残っている。

天平十九年七月六日の「荒田井牛養解 申勸出進事」（正倉院文書）によれば、当日は莊嚴経や正法念処経などが書写されて校正が為されたが、その誤脱は一卷につき一字未満であり、極めて正確である。経疏の書写の方がやゝ複雑で面倒かとも思われるが、やはり当日に校正された注維摩詰経について次の様に報告している。

注維摩詰経帙 一三四巻 落四
五七九巻 誤三

注維摩詰経の校正結果は、第一乃至巻四は各巻に一字の脱字があり、巻五、巻七、巻九には各一字の誤字が認められ、巻六、巻八、巻十には訛脱が全く見い出されなかったのである。仏典書写が組織的かつ正確に行なわれていた当時の実態を窺うことが出来る。やがてかつての

写経所は専ら経律論の三藏を担当する写経所と注釈章疏を受け持つ写疏所とに分けて行なわれる。この書写という営為は經典自らが勧める經典書写の功徳を求めたものであると共に、仏法護持の熱意にもとづくものである。

平安時代には写経所の制は廃せられるが、諸大寺や貴族らによって仏典書写の営みは間断なく続いていたのである。延暦十六年（七九七）、最澄は比叡山に一切経を備えるために南都東大寺など諸大寺に門下を遣わして書写に努めている（叡山大師伝等）。また天長十年（八三三）には一切経が二部書写されて弥勒寺と神護寺とに安置されている（続日本後記）。更に一人でもって一切経の全てを書写するという例もある。藤原定信（一〇八八―一一五六）は二十三年間もかけて一切経をたった一人で写し終え春日神社に奉納している（宇槐記抄）。また鎌倉時代の初めに色定良祐が文治二年（一一八七）二十八歳から安貞二年（一二二八）六十九歳まで実に四十二年間をかけて一切経書写を達成している。今日もその一部が存する。このようにして確実に仏法は護持されてきたのである。

一方、仏書の刻版は、わが国では既に奈良時代以前から行なわれていた。天平宝字八年（七六四）に印刷されたという法隆寺所伝の百万塔陀羅尼が現存する。印刷物の

最古の遺品として広く知られている。その後、寛治二年（一〇八八）に興福寺で成唯識論が開板されるに至り仏書刊行が本格的に行なわれるようになった。爾来、鎌倉時代まで興福寺で印行された仏書は春日版と呼ばれている。また高野山でも建長の頃から近世に至るまで仏典が刊行され高野版として知られている。この他に室町の頃、京都の禅林で所謂五山版が開板されているが、それらはいずれも単行の仏典を印刷出版したものであり、一切経即ち大藏経を開板したものではない。大藏経開板は江戸時代になってからのことであるが、大藏経の開板の計画は既に中世に始まる。その嚆矢は鎌倉の弘安年間（一二七八―一三八七）に行円が、勅願を承けて一切経の開板を試みている。このことは正安四年（一二三〇）に智泉の開板した観無量寿経の刊記に見える。実は行円の計画は一切経のすべてを新雕しようとするものではなく、既刊の刊本を蒐集した上で未刊行の仏典を新刻して補完しようとしたものであったが、実際には僅かに観無量寿経等の開板を行なっただけで終わったようである。

慶安十八年（一六二三）には伊勢常明寺法楽院の宗存がやはり大藏経の開板を発願し江湖の寄附を集めて刊行を開始した。これは高麗版を底本と為し、木活を用いたも

のであったが、印刷部数は僅少でしかも全巻の完成には至らなかった。

わが国で大藏經全藏を開板したのは徳川家光のとき天海によって為されたことは周知の通りである。寛永十四年（一六三七）、寛永寺に経局を設け、木活を使用して十余年を費して完成している。その収蔵典籍は一千四百五十三部六千三百二十三巻で、南宋思溪版に拠り、若干は杭州版をもって補ったものと考えられている。徳川幕府の資金を用いて為された事業であり、上質の和紙に印刷された美本であったようであるが、印刷部数は少部で広く流布しているわけではない。

天海版に比して仏典の普及に絶大なる貢献を為したのが鉄眼道光による大藏經の開板である。寛文八年（一六六八）、鉄眼三十九歳のとき大坂月江院で大乘起信論を講じた際に、校正の行き届いた善本の必要性を感じ、大藏經出版の志を衆人に告げたのである。自ら大藏經縁起疏を作って広く募財につとめ文字通り東奔西走し、天和元年（一六八一）、五十二歳のとき漸く一千六百十八部七千三百三十四巻の刻藏を完了したのである。天海が徳川家を檀越として事を為したのに対して鉄眼は、門下の宅州道聰の援助や庶民の浄財があったとしても、謂ば個人の

事業として完遂したところに仏法護持の熱烈な精神を感じるのである。当時諸山に多く大藏經を安ずることが出来たのは偏に師の功績であり、仏教学の発展に寄与するところも亦絶大である。鉄眼の資たる僧濬鳳潭が各宗の学を修め万巻の書を著し得たのもこの大藏經に依るところ極めて大きいと考えられる。

明治以降、時代の要請に従って日本独自の大藏經が陸續と出版される。それらは木版や木活ではなく、金属活字によるものである。先ず明治十四年に刊行を開始した縮刷大藏經である。縮刷大藏經は高麗版を底本として宋元明の三藏を以て校合したものである。その校正には日本の各宗派から六十余人もの人材が選抜されて推進された。それ故この藏經の校正は厳密で学術的価値において高く評価されている。刻藏において校訂校正が如何に大切であるかを如実に示している。従来、日本で出版された大藏經は（天海版は南宋の思溪版に、鉄眼版は明版に依るように）中国の大藏經の配列に従うものであったが、縮刷大藏經では改めて明の智旭の閱藏知津によって五部二十五門に分類し、五百十六部八千五百三十四巻の仏典を収めた。

その後明治三十五年から三ヶ年を費して卅字大藏經が

出版された。これは所収典籍六千九百九十巻の全てに訓点を附したことに特色がある。ただ惜しむらくは縮蔵に比して校正上の遺漏が指摘されている。

前記のいずれの大蔵経もそうであるように所謂印度撰述の経律論が中心である。天台智顗の三大部入蔵の例を引くまでもなく、入蔵は容易なことではなく若干の例外を除いて中国撰述の諸章疏や禅籍等はほとんど入蔵されてはいないのである。そこで卍字蔵経の完成に引き続き龐大な中国仏教典籍を収める続蔵経の出版が企てられた。明治三十八年の四月八日の仏降誕の日にその第一巻を刊行し、以後毎月一卷宛を配本し続けて大正元年十一月に至って百五十套七百五十冊の全ての刊行を完結した。後年、編纂主任の中野達慧の語るところによれば更に二十套乃至三十套の追加刊行を計画していたようであるが、それでも続蔵経には印度・中国の九百五十余名の撰述になる一千七百五十六部七千一百四十四巻の仏典を彙輯しているのである。そのうち印度撰述である二百十部三百九十三巻の典籍の大部分が密教儀軌であり、残りの一千五百四十六部六千七百五十一巻はすべて中国撰述仏典である。その中には中国では既に散佚し、わが国にのみ伝存する章疏も少なくない。

梁の天監八年（五〇九）の武帝の序を卷首に附す涅槃經集解七十一巻などは一千四百有余年を経て大正元年に至って初めて大蔵経に編入されたのである。更に僧肇の肇論や竺道生の法華經疏なども亦、続蔵経によって初めて入蔵されたのである。中国仏教典籍の宝庫であり、中国仏教の研究に益すること無限である。それ故に後に上海でも影印され逆に中国に輸入されることになる。

名藍の宝庫を搜り、古刹の珍蔵を集めて十有余年を費し、七千余巻もの典籍を収めた続蔵経の編纂は並み並みならぬものがあり、その努力に対しては至大の敬意を払うものである。だが本蔵の底本やその批校本に就いては全く言及するところが無く、果して参互校讐が為されたか否かについてもそれを明らかにしていない。この点が筆者には惜しまれてならぬのである。刻蔵に際して校勘が如何に重要であるかについては申すまでも無いことである。

浄土宗の忍澈はかつて往生要集を講じた際、明蔵を見て大いに疑問を生じ、高麗蔵によって得るところがあり、慨然嗟嘆し大蔵対校を志した。宝永三年（一七〇六）二月、門下の直絃ら十余名の同志とともに獅子谷で蔵経対校を始め、更に近衛基熙の斡旋を得て山門不出であつた建仁

寺所藏の高麗藏と明藏とを校合し、異字を行間に注して宝永七年四月に至り、その業を了えたのである。かゝる経験にもとづいて大藏經対校録百巻を撰せんとしたが、適ま病を得て完成することが出来ず、後に寛政三年（七九二）、音激・典寿らの門弟によって漸く編纂を了えたのである。また寛政四年（二七九二）には草山祖芳が大般若經校異を刊行している。更に文政十年（一八二七）、本山の命を拝して黄檗版大藏經と建仁寺の高麗藏との校勘を行ない、十年を費して天保八年（一八三七）にその業を終えた真宗大谷派の丹山順芸の業績とその意義については既に周知のことであり、今更喋々するまでも無いであらう。これらの諸師の業績を見るとき、藏經の刻印に於て殊の外に校異校訂が重要なことを切実に知るのである。

より学術的な善本を求める要請は止み難く、大正十一年の計画立案から昭和九年まで十三ヶ年の歳月を閲して新らたに大正新脩大藏經百巻が出版されたのである。しかも大正十三年五月の第一巻阿含部上の刊行から以降、休むことなく毎月毎月一千頁もの大藏經を配本し続けて完成したのである。

大正新脩大藏經は単に従来の藏經の集大成ではなく新

らたな組織と資料とをもつて編纂することを目指したものである。その結果、わが国の仏教者のみならず欧米の学者にとつても「仏典の決定版」（「再刊の趣旨」）として用いられていると刊行会は自負している。刊行会が大正新脩と称し、その新脩たるの骨目として挙げる第一の特色は「嚴密博渉の校訂」にあった。かの張之洞は善本の要件として足本（無欠巻、未刪削）・精本（精校）・旧本（旧刻旧鈔）の三条件を挙げてゐる。実に大正大藏經の刊行はその充足を目指している。

刊行趣旨（大正十二年）に次のように述べているのである。

蓋し最近二十年、中央亞細亞の發掘事業躍を接して盛んに泰西に起るや、于闐、燉煌、龜茲、高昌等の諸古国、廢墟の下千年の珍籍を出し、石峯深き所驚異の秘庫を発ぎ、六朝の古經、唐宋の手写、続々として江湖に現われ、佚經奇書今や英仏の書庫に累々山積するに至る。某等は先づ此古本に就きて現行本との至蔽の校讐を行はんとす。是独り大正の昭代に於て能くし得べき所、夫何等の慶福ぞや。某等は之に加ふるに正倉院勅封の天平古写經拝觀の允許を得、之に参酌するに、大山巨利名門貴紳の秘藏古經を以

てし、所有する内外の資料を尽くして周到の対校を行ひ、現行一切經の紙繆を是正せんと欲す。

よって大正の新脩と稱し、時代相應の新刻大藏經として刊行したのである。その校閱編纂の事業は実に筆舌に尽し難いものであつたろう。芝の増上寺の閱藏亭において高麗藏を底本と爲し、南宋思溪版、元大普寧寺版、明方冊藏經の三大藏經を以て対校し、加うるに正倉院聖語藏の天平古写經および新出の燉煌写本等を用いて校訂し遺漏なきように十全を期しているのである。それを毎月定期に刊行すると云う制約の中で遂行されたのである。かくして昭和四年三月には「正藏」五十五卷を完結した。正藏は經律論の三藏と中国撰述の主要章疏等二千一百八十四部から成っている。正藏五十五卷の中第三十二卷までがいわゆる印度撰述の仏典で、これらに対する校勘は嚴密を極めており、刊行趣旨に謳う大正大藏經の特色を如何なく發揮している。

例えば大品般若經は高麗版を底本とし、宋（思溪版）・元・明の三本を以て対校し、その上で宮内省圖書寮の北宋勅版、正倉院聖語藏の唐經や東大寺所藏の奈良時代の古写本を以て校合している。更に諸本で異同のあるところは梵本をも参照しているのである。

また妙法蓮華經は右の四大藏の対校は勿論のこと、宮内省圖書寮の北宋勅版、東京帝室博物館所藏の武周長壽三年（六九四）李元惠写本、大英博物館所藏の燉煌写本二種、法隆寺所藏の神護景雲元年（七六七）孝仁写本（卷第三）との批校を爲し、そのうえサンスクリット原典との校訂が嚴密に行なわれている。

律藏や論藏の校合についても同様に十全なる配慮が払われている。この様な至嚴の校勘を経て出版された權威ある大藏經に由つてわれわれは日頃限り無い恩沢を蒙っているのである。

われわれは經律論を読むときは勿論のこと、經律論に対する中国撰述の注疏などを読む場合もやはり大正大藏經を依用する。經疏・律疏・論疏あるいは諸宗部などの中国撰述仏典に対しても印度撰述の經律論と同様に諸本校合を経た「仏典の決定版」としての權威を暗黙のうちには認めているのである。

しかれば大正大藏經所収の中国撰述仏典の校合の状況は如何なるものであろうか。

例えば法相宗の窺基の法華玄贊は、興福寺所藏の保安三年（一一三二）の古写本を底本とし、聖語藏の天平写本、燉煌出土の唐代写本、法隆寺所藏の古刊本を以て校合し

ている。又、華嚴宗の法蔵の華嚴經探玄記は高麗版を底本とし、聖語蔵の二種の古写本と嘉暦三年・元徳三年・康暦三年の三種の刊本を対校本に用いている。

中国撰述仏典の校合に關して右のように十分な配慮が為された例は必ずしも多い訳ではない。むしろ中国撰述仏典について云えば原本一種のみで批校本の全く存しないものも極めて多数にのぼるのである。中国仏教史上に偉大な足跡を遺した淨影寺の慧遠や嘉祥寺の吉蔵らの著述も嚴密な校訂を経ず、坊刻本たる一刊本をそのまま大蔵經に編入しているものが圧倒的に多い。慧遠の著述の中で大正大蔵經所収の次の典籍は全く対校本が無く、左記の一刊本をそのままに編入しているのである。

維摩經義記

正徳三年(一七一三)刊本

無量壽經義疏

承応三年(一六五三)刊本

觀無量壽經疏

江戸時代(無年紀)刊本

大乘起信論疏

寛文九年(一六六九)刊本

吉蔵の著述についても実情は全く同様である。

中觀論疏

江戸時代(無年紀)刊本

百論疏

延宝八年(一六八〇)刊本

十二門論疏

江戸時代(無年紀)刊本

大乘玄論

江戸時代(無年紀)刊本

金剛般若經疏

不明

仁王般若經疏

寛文元年(一六六一)刊本

法華玄論

天和三年(一六八三)刊本

無量壽經疏

元禄十四年(一七〇三)刊本

觀無量壽經疏

江戸時代(無年紀)刊本

金光明經疏

正徳元年(一七一)刊本

大正大蔵經所収の右の中国撰述の典籍については全く対校が為されていない。大正大蔵經の刊行会は明治の縮蔵や卍字蔵を評して「校訂の如きも、時代の進運と共に改善を加うべき余地少なからず」と断じ、みずからの大蔵經を「所有する内外の資料を尽して周到の対校」が為されたと述べている。ところが印度撰述部の仏典はともかくとして入蔵仏典の過半に近い中国撰述仏典については必ずしも「周到な対校」が為されているとは決して言い切れない。この様な印度撰述と中国撰述の仏典に於ける校合上の精麁の差は、仏典の決定版たる大正大蔵經を手にした当初は全く予想だにしないことであった。

吉蔵の大乘玄論は前記のように江戸時代の刊本が底本として用いられているが、他の古鈔本や古刊本との批校は全く為されていない。大乘玄論の刊本には出版史上で著名な鎌倉時代中期の醍醐寺版が現存する。弘安三年

(二二八〇)、寂性と称する学僧が三論宗およびその学問の衰退の著しいことを慨いていた師匠の十三年忌に当るこの歳に、師の追福のため大乘玄論五巻を開板した。その板木は残念ながら火災で失なわれたが、十五年後の永仁三年(一二九五)に醍醐の学侶によって再び大乘玄論が重刻されたのである。この醍醐寺版の大乘玄論五巻が現存している。その後、開板された江戸時代の各種の刊本は悉くこの醍醐版に基づいている。大乘玄論には洛下書林田中庄兵衛・井上忠兵衛の刊行(寛永九年一七〇九刊)したものや洛陽寺町の中野五郎左衛門・前川茂右衛門の刊行(無年紀)したもの等があるが、共に永仁三年三月二十一日の跋を附しており明らかに醍醐版に基づくもので内容も全同である。要するに大正大藏経の原本(底本)となつた刊本の源を尋ねればやはり永仁三年刊の醍醐寺版大乘玄論に到達する。かく述べてくれば大正大藏経に於て何を底本と為し、何を対校本と為すべきかは歴然としてゐるであらう。

中国仏教を代表する律宗の道宣、法相宗の基、華嚴宗の法蔵らの著述の中の数部についても同様の状況にある。即ち、次の中国撰述仏典は対校本が無く、左記の一刊本をそのまま大正大藏経に編入しているのである。

道宣・関中創立戒壇図経 江戸時代(無年紀)刊

道宣・釈門章服儀 寛文七年(一六六七)刊

道宣・量处輕重儀 貞享五年(一六八八)刊

窺基・大般若波羅蜜多經般若理趣分述讚

享保元年(一七一六)刊

窺基・阿弥陀經疏 寛政四年(一七九二)刊

法蔵・大乘法界無差別論疏 正徳元年(一七一)刊

法蔵・入楞伽心玄義 元禄十六年(一七〇三)刊

右のようにほとんどが十八世紀のいわゆる町版の一刊本を原本としてそのまま編入している。曇鸞の浄土論註、善導の法事讃、憬興の無量寿経連義述文讃なども同じ事情の下にある。

更に大正大藏経所収の中国撰述仏典の中には次のような例がある。即ち、明治に刊行された統藏経を以て原本と為すものである。何らの対校本もなく統藏経をそのまま編入したものも亦多数ある。印度撰述仏典においては全く考えられないことである。中国・朝鮮の仏教に重要な地位を占める次の典籍は、いずれも統藏経本をそのまま大正大藏経に収めているのである。

鳩摩羅什法師大義(大乘大義章)

僧肇・肇論

元康・肇論疏

吉藏・大品經遊意

吉藏・涅槃經遊意

杜順・華嚴五教止觀

智儼・華嚴一乘十玄門

法藏・華嚴策林

道宣・律相感通伝

道宣・中天竺舍衛國祇洹寺図經

慧沼・勸發菩提心集

円測・般若波羅蜜多經贊

元曉・弥勒上生經宗要

太賢・大乘起信論内義略探記

右の中で大乘大義章を例にとれば、大正大藏經第四十五卷に収められており、原本は統藏經である。統藏經本がそのまま大正大藏經に編入されているとすれば、統藏經の底本が如何なるものであるかが気になる。この統藏經の底本については既に牧田諦亮博士によって紹介されている。牧田博士に従えば、統藏經の編纂者が大乘大義章の原本として採用したのは現在京都大学附属図書館に所蔵される「明治初年書写と思われる『大義聞書』と表書した『鳩摩羅什法師大義』にもとづいている」のである。

る。しからば明治初年の書写本のみが大乘大義章の天下唯一の伝本かと云えば決してそうでは無い。最存最古の鈔写本としては京都禅林寺（永観堂）に伝わる鳩摩羅什法師大義三卷が知られている。その巻下の末尾に、

永仁元年八月廿七日 書写校合畢

との識語があり、鎌倉中期に書写校合されたものである。現に京都大学人文科学研究所の『慧遠研究』遺文篇では、この禅林寺所蔵の永仁元年書写本を以て底本とし、統藏經本や丘檠氏校刊本などの諸刊本を以て校勘してテキストを定めている。（また牧田博士の所論によれば禅林寺に伝わる貴重な古鈔本の中には大乘大義章の外にも承元元年（一二〇七）書写の十二門論疏や中観論疏など三論宗関係典籍が多数所蔵されているという。それらも亦、大正大藏經の原本又は対校本に採用されていない。）

大正大藏經の中で統藏經本に依っているものの幾種かは確かに他に伝本の存しないものもあるが、大乘大義章などのように他にすぐれた伝本の存するものも少なくない。大藏經の校勘には細心の配慮が要請される。

更に大正大藏經所収の中國撰述仏典には縮刷大藏經や大日本仏教全書本をそのまま編入しているものもある。

智顗・六妙法門

潜真・菩提心儀

智慧輪・明仏法根本碑

前二書は縮刷蔵に、後の一書は大日本仏教全書に拠っている。六妙法門は天台智顗が三種止観の一たる不定止観を説いたもので短篇ではあるが、天台止観を学ぶ上で貴重な書である。この六妙法門は縮刷蔵をはじめ金藏・続藏經の諸蔵本や諸刊本が存する。菩提心儀については空海が入唐中に彼の地で直接に書写したものが伝わっている。即ち三十帖策子の第二十帖に百八尊法身契印等と共に本書が収められている。この他にも単行の刊本も伝わるが、それらとの校合は行なわれていない。又、明仏法根本碑は智慧輪三蔵が密教の要旨を広く人々に伝える為に長安城内に建立した碑文である。長安の碑文は今に伝わらないが、転写されたものが京都観智院金剛蔵に所蔵されているという。それらとの対校は無い。これらの事實は大正大藏經所収の印度撰述の經論における至嚴な校訂と比較するとき全く予想もされないことである。

前述のような事例の外に大正大藏經の中国撰述仏典には、単に一種の写本のみに拠るものもある。続藏經や縮藏などや諸刊本よりも写本には更に多くの問題を含んでいることは論を待たないであろう。

隋慧遠の《大般涅槃經義記》は龍谷大学所蔵の応永三年（二三九六）の写本を、新羅元曉の《涅槃宗要》は日光輪王寺所蔵の天治元年（一二二四）の写本によっている。他に対校本は無い。これら写本は貴重な珍書ではあるが、概して刊本に比して写本には誤謬が生じ易い。

筆者はかつて涅槃宗要について考察し、論文に纏めた「元曉の涅槃宗要」本誌二十五号が、その際に本書を一読し文意相通せず、焉馬の疑いを強くした箇所は二、三にはとどまらなかった。その折のノートによって若干の例を示せば次の如くである。

意—竟	於—相	是—足	是—曼	下—不
怯—法	實—寶	雨—兩	密—察	槃—般
耶—取	身—事	天—在	能—純	夫—矣
來—乘	音—皆	倒—例	諸—請	德—僧

大正大藏經所収の涅槃宗要から僅かの例を示した。未だ輪王寺の写本を実見していないが、右の例は文意が通ぜず焉馬の疑い極めて濃厚である。また衍脱と思われるものも少なくはない。しかし、大藏經のこと故、恣に改めることは慎しまねばならない。かゝる事例に接するとき、起信論を講じた鉄眼や往生要集を談じた忍濃が大藏經の印造や校勘に精力を傾注した所以に頷くことが出

来るのである。

ただ一写本のみを以て刻印した場合、その刊本が權威をもって流布し、後に衍脱誤字を改める手立てを失うことを恐れるのである。宋の葉夢得も石林燕語(四庫提要子部)に、

世既一以版本為正、而藏本亡日、其訛誤不可正、甚可惜也。

と教示している。わが敬首も忍澤の教えを繼承して、中華の書には一種に頗る多版あり、必ず善本を得て校合すべしと語っている(典籍概見)。共に傾聴すべき言葉である。

仏教東漸以来、幾多の学侶によって著述された仏書は、先述のように或いは書写され、或いは刻印されて脈々として伝承されている。だが、歳月を閲するうちにやがて類本なく、天下の珍書となったものも少なくはないであろう。仮令、古刹に伝持する稀覯の書が存するとしても必ずしも全てに互って搜索の目録が編まれている訳では

ない。大正大藏經の編纂者が諸本捜求や校合に払われた精勵恪勤は並み並みならぬものであったろう。今いさか望蜀の念をもって中国撰述仏典に限り校勘の問題に言及したが、それは大藏經の瑕疵を指摘しようとするものでは決して無い。むしろ編者の尺瘁の勞を多とし、藏經によって蒙る至大の恩を謝するものである。ただ、藏經を依用する(殊に中国撰述仏典を学ぶ)場合、前述の如き永い仏法護持の歩みに思いをよせつつ、原本や校勘等に関しても十二分の配慮が必要なことを喚起したいのである。

清の孫從添はその藏書紀要に、

書籍不論抄刻好歹、凡有校過之書、皆為至宝

と述べている。実に書籍において書かれた字や印刻の好歹即ち良否を論ずることは重大な問題ではない。むしろ十分なる校勘を経過した書こそが至宝とされるのである。況んや大藏經においておやである。